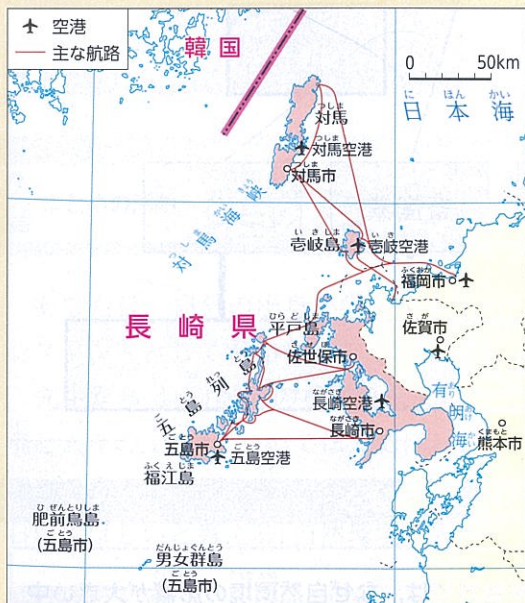


ICTで変わる離島の医療

交通の面で課題をかかえる離島の医療について、離島の多い長崎県を事例に考えてみましょう。



①長崎県のドクターヘリ 救急治療用の機器などを装備したヘリコプターに医師や看護師が乗りこみ、患者のもとに急行します。



②多くの離島がある長崎県



③タブレット端末を利用した診療 医師と患者との間をインターネットでつなぎ、診断や診療を行います。

多くの離島がある長崎県

長崎県は、佐賀県と接している北東部以外は、全て海に面しており、対馬、壱岐、五島列島など、600近い島があり、そのうちの70余りの島に人々が暮らしています。長崎県では、島と島、島と九州本土との間の移動手段として、昔から海上交通が重要な役割を果たしてきました。しかし、人口が減って定期船の利用者が減少したことで、便数が減ったり、廃止されたりしています。本土からはなれた離島では、医師の数が不足しており、離島で暮らす人々にとって、医療を受ける環境が大きな課題になっていました。

離島の医療を変えたドクターヘリ

こうしたなか、長崎県では2006(平成18)年から、緊急時に医師や看護師がヘリコプターに乗ってかけつける「ドクターヘリ」の運用を、全国に先駆けて開始しました。離島や山間部からの救急要請での、患者の病院への搬送にかかる時間を短くしただけでなく、かけつけた医師がその場で救急治療ができるようになり、救命率の向上や後遺症の減少に大きく貢献しています。

ICTを生かした新たな医療の可能性

長崎県では、ICT(情報通信技術)を生かした医療の取り組みも進められています。長崎県の多くの医療機関では、2004年から電子カルテが導入され、離島にいる患者と、本土の病院にいる医師とをインターネットでつなぎ、はなれた場所で診療が受けられるようになりました。過疎化や高齢化、医師の不足が課題の離島では、こうしたICTを生かした最先端の医療の普及が進められています。今後は、自宅で医師の診察が受けられる在宅医療にもICTを活用することで、交通の面での課題をかかえる離島での医療の改善にもつながることが期待されています。